

メダッドには違う歌が聞こえる ペドロ・サー・モラエスによる再話

「あのお話、もう一度、私たちに話して聞かせて、ラビ！」

熱意のある若者たちの小さなグループが、ラビ・ゼカリヤの家の薄暗くともされた書斎のテーブルを囲んで集まっていました。そのラビは賢い人で、コミュニティーの最年少のメンバーとこのような集まりでは、彼の快活でユーモアにあふれた一面を見せました。

「どの話かな？」彼は瞳をキラリとさせて尋ねました。

「ああ、ラビ、私たちがどの物語のことを言っているか、あなたはご存じでしょう！例の、若いベース奏者についての物語ですよ」と、彼自身、音楽家を志望する若者、シャウルが言いました。

「ああ、あの物語かい！」

何世代にもわたって伝えられてきた洞察にあふれた不可思議な物語を語ることほど、この年輩の人を喜ばせるものはありませんでした。高齢になって、いまだにはっきりとした記憶力に恵まれている彼は、ようやくのこと、ゼカリヤ、すなわち「神が覚えている」という彼の名前の意味に感謝することができると感じていました。

「この物語はね」と、彼は穏やかな調子、厳粛とも言えるような調子で言いました。「私のおじいさんから教わったんだよ。おじいさんは、またそのおじいさんから教わった。彼はその出来事を自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の心で感じたんだよ」

そうして、ラビは物語を語り始めました。

「私が話そうとしている出来事は、ベッサラビアという地方の小さな村で起きた。その村は、あらゆる祝祭と社交的催しで最も重要な、村のクレズマー(訳注:ユダヤ系の伝統音楽)の楽団で有名だった。皆も知っているように、その当時のラビたちの中には、世俗的な音楽家であり、舞踊音楽の創作者であるクレズマーの音楽家たちをあまり好まない者たちもいた。だが、この村のラビであるラビ・シュムーエルは、違った考えを持っていたのだ。彼は、クレズマー音楽の中にある、切望と静寂の響きを正しく評価した。それに、しばしば陽気で騒々しいクレズマーの歌の旋法、つまり旋律のパターンが、ユダヤ教の会堂で歌われているお祈りをいかに取り入れているかも正しく理解していた。彼にとっては、クレズマーの歌は神聖な儀式と日常生活との間に旋律の橋を築いてくれたのだよ」

「村の楽団がベース奏者を失い、彼の代わりになる経験のある音楽家が現れる様子もなかった時、ラビは、その楽器を学び、そのうちにその役目を引き継ぐことのできる誰かを探すことに、個人的に携わっていた。彼が探し当てた候補者は、内気で優しい振る舞いのもの静かな若者で、メダッドと言う名前だった。彼は、一日を送りながら、常にハミングしたり、穏やかに歌を口ずさんでいることで知られていた。『その少年は、大変音楽が好きなのだ——彼ならば、確かに、楽器をすぐに習得するだろう』と、ラビは思ったのだよ」

その時、若いシャウルが物語をさえぎり、戸惑ったまなざしで尋ねました。「でも、ラビ、ベースは本当に難しい楽器ですよ。習得するまでに何年もかかりますよ」

「そう、その通りだ、私の若い友人よ」。立派な物語の語り手は、忍耐強く答えました。「でも、彼が楽器に手を掛けるや否や、メダッドは、大喜びだった。彼は練習をし、とても熱心に練習したので、簡単なパターンや旋律をたちまちのうちに弾くことができるようになったのだよ。間もなく、彼はリハーサルにも加わり、他の楽団員たちと一緒に小さな催しで演奏するようになった」

ラビ・ゼカリヤは、続けました。

「楽団の音楽家たちは、この若者の穏やかな物腰と、楽器に対して心の底から身を委ねる様子に心を動かされた。彼らも、彼の学びを支え、彼がくつろげるように心を砕いた。時折、彼は、彼の音楽の夢に大変深く没頭したので、内なる世界に引きこもってしまうこともあったのだ。これは、驚愕に値する光景だった！ その目は半分閉じられ、身体は揺れ、その顔には自然に笑みが浮かんで、「愛される者」という意味の名前のメダッドは、まさに愛を体現していた。村人たちは楽団の周りを取り囲んで集まり、手をたたいたりして、この若いベース奏者の純粋な喜びに熱狂したのだ」

「練習を重ね、メダッドの技術は一層しっかりとしてきた。彼は、さらに良い音楽家になっていった。けれども、彼のリズムや音が、残りの楽団のそれと異なった方向に向かっているように思われる瞬間がいつもあった。自分だけのメロディーを弾いているように見える時、彼はとても楽しそうに没頭していたので、彼の間違った音を直そうとする気持ちを持った者は誰もいないほどだったのだ」

「村の楽団のベース奏者として正式に採用されてから2カ月余り、素晴らしいお祝いが催された。それはラビの長男と、裕福な商人の娘との結婚式だった。かなりたくさんの地域から、友人や親戚が待望の供宴に参加するためにやって来た。娘の家族は特別な舞台を備えた巨大なテントを立てた。そこから楽団は、渦巻くメロディーと活気に満ちたリズムで、何時間もの踊りに生命を吹き込むのだよ」

「さて、この時点まで、楽団の他の演奏者たちは、メダッドの夢に穏便に対応し、それらに親愛の念すら持っていた。でも彼らは、そのような巨大な催し物は、楽団の一員としての務めについて彼が学ぶ良い機会ではないか、と考えた。それで彼らは悪ふざけをすることで、彼の音楽教育に貢献しようと決めた。次に、一緒に演奏している旋律から彼が外れて、どこか遠い所へ飛び立ち始めていることに気づいた時には、彼らは徐々に演奏を止めて、気まずい沈黙によりメダッドが決して忘れることのない教訓を教えようというのだ」

「お祝いが始まり、楽団はその最高の演奏をしていた。パーティーの歌は、新郎新婦に敬意を払い、新婚夫婦への皆の祝意に声を与え、心を揺さぶるものだった。数時間後、音楽家たちはベースの音が違うパターンへ移行し始めていることに気づいた。初めはそのずれは目立ってなかったが、そのうちそれは顕著になったのだ。音楽家たちはメダッドをちらりと見ると、思った通り、彼は目を半分閉じて、顔には満面の笑みが広がっていた。それで、同意していたように、楽団員たちは一人ずつ演奏を止めた——最初はバイオリン奏者、それから、クラリネット奏者、フルート奏者、打楽器奏者…最終的にメダッドだけが演奏していた。結婚式の招待客はそれに気づき、すぐに冗談の意味を理解した。皆、つまり、メダッド以外ということだが。メダッドの目は、今やもう少し大きく開かれ、テントの天井の方を見ながら、同時に彼の指は自信を持って着実に弦をかき鳴らし続けていた」

「何人かの招待客は笑い始めたが、ラビが笑う前にそうすることは無作法なので、すぐに自重した。そしてラビは笑わなかった。ステージ近くの椅子に座っていたラビ・シュムールは、メダッドをじっと見詰めていた。すると他の全員が静かに立ち上がり、メダッドが演奏するのを見た。そして彼はとても激しく、そして奔放に演奏したので、彼の音楽に反応してもっと強い風が吹き始めたように思われたのだ」

この瞬間、語り部は一息ついて、茶わんから一口飲みました。そして彼はほほほ笑み、若者たちが夢中になって聞いているのを楽しんでいました。「実際」と、ラビ・ゼカリヤは続けました。「風はもっと強く吹き始めたのだ」

「そして強く、もっと強く…テントの天井が1枚ずつ音を立てて外れ、飛び去ってしまうまで。その上方に、招待客たちは無数のきらめく星が散りばめられた濃紺の最も美しい空を見た。そしてその星々から柔らかな青みを帯びた光が、結婚式場に向かって滝のように降り注いでいた」

「うなる風が徐々に収まっていく中、メダッドは周りのすべてのことに気づかず、演奏し続けた。その時、一人、そしてまた一人、やがて出席者全員が、聞こえる楽器の音は、メダッドのベースの音だけではないことに気づいたのだ。そこには、柔らかいチリンチリンと鳴るシンバルの音、鐘の音、かすかな太鼓の音、天上の声があった。それらの声は崇高なメロディーを歌っていた。これまで聞いたことのあるどんな音楽よりも、それは心奪われるものだった。メダッドのベースの音は、一つ一つが天の音と完全に同調していた。そこにいる全員が、若いベース奏者と、天使としか言い表せられない、たくさんの見えない音楽家たちの高貴な音楽に浸されたのだ」

「その音楽はそこにいた者全員を、それぞれの心の深い静けさの中に、人生の神聖さの気づきへと引き込んだのだ」

「どれくらいか分からない時間の後、招待客は目を開け、祈りに満ちた静けさの空間から抜け始めた。彼らは周りを見渡し、あたかもお互いに、『あなたは私が見たものを見ましたか？ あなたは私が聞いたことを聞きましたか？ あなたは私が感じたことを感じましたか？』と問い掛けるように、見聞きしたことについての認識の視線を交わしたのだ」

「そして音楽家たちの舞台には、ひざまずいている新郎の父親であるラビ・シュムーエルがいた。彼はうつぶせの若い男——招待客たちはすぐにメダッドだと気づいた——を見詰めてい

た。ラビの目は涙であふれていた。彼を見ていた者たちは突然、その若いベース奏者はもはやこの地上に彼らと共に居ないことを知ったのだ。それから人々は空の方を見上げた。わずかな雲が形作られていたが、それはまだ彼らが見た最高に美しい夜空の一つだった」

『友よ』と、ラビ・シュムールは優しく言った。『神は私たちの若い音楽家を、天の楽団に加えるために召されました』

「彼はもうそれ以上語る必要はなかった。皆、その瞬間、彼らに囲まれて暮らしていたにもかかわらず、メダッドは常に神の歌を聴き、演奏していたことを知った。彼はただ神と共に居ることを熱望し、そして神はその愛に応えたのだ」

ラビ・ゼカリヤが彼の物語を終えた時、書斎の雰囲気は静まり返っていました。しばしば落ち着きがなくおしゃべりな若者たちは、深い静穏の中に浸っていました。

しばらくすると、若い音楽家志望のシャウルがその静けさを破りました。

「ラビ、お尋ねして申し訳ありませんが、どのようにしてあなたはこれが実際に起きたと分かるのですか？ どうやってこれが単に何らかの言い伝えではないと分かるのですか？」

賢いラビ・ゼカリヤは愛情を込めてほほ笑みました。「あなたの名前、シャウル」と、ラビは言いました。「あなたは本当にそれにふさわしく生きているんだね。それは『質問する』という意味だ」。彼らは笑顔を交わしました。

「私も、そのような質問をしたものだ」と、ラビは続けました。「時がたち、私はこれらの古い物語の比類のない性質を理解した。それらは私たちが内側の感覚に同調することや、目や耳が届

かないものを認識するのを助けてくれるのだ。そしてこのような瞬間、深い静けさが覆う時に、私たちがまたかすかなチリンチリンと鳴るシンバルの音を聞くかもしれないのだよ」



© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。